

主日礼拝

礼拝6月26日(日)

題 『救いの約束と実現』

テキスト：ペトロの手紙一 1章10～12節

おはようございます。

先週は、天と地の創り主である神さまがキリスト者に与えてくださった「生き生きとした希望」についてイエスの弟子ペトロの語ることばを聞き学びました。

神は、独り子であるイエスをこの世に遣わし、ご自分の思いを語り、イエスの十字架の死と復活のいのちによって、人間を罪と死から救い出して永遠のいのちを約束してくださったのです。そして、イエスの弟子たちとそれに続く信徒たちは、この世では、なおしばらくの苦しみ、キリスト者ゆえの迫害もあるが、耐え忍んで生き生きと希望を持って生きるように励ましてくださったのです。事実、ローマ帝国によるキリスト迫害も実際に行われたのです。

ところで、わたしが中学生の頃、学校の国語の教科書にのっていた忘れられない短編小説がありました。アメリカ人の作家ホーソンの「大いなる岩の顔」という小説です。記憶違いの所もあるかもしれませんが、あらずじは、「ある村の溪谷に少年アーネストは育ちます。この溪谷からは、向いの山の上の岩が、大きな人の顔に見えるのです。村に伝わる伝説では、この溪谷出身の偉大な人が何時の日か現れ、その顔は、あの山の岩にある崇高にも見える顔と同じだということです。少年アーネストは、その「偉大な人」に会いたいと思い、待ち続けるのですが、外の世界から溪谷に帰って来た「成功者」は、ある人は金を儲けたが、アーネストには、その富豪の顔は、岩の顔とは似てもにつかぬ守銭奴(しゅせんどう)の顔に見えたのです。また、戦場で活躍した将軍や、政治家なども、溪谷に帰ってきますが、いずれも、アーネストには、岩の顔に相応しい、優れた人には見えませんでした。こうして歳月が経過するうちに、アーネストも老人になりました。その暖かい心や、深い知恵、優れた精神などから、溪谷の人々から深い尊敬を受ける身となっていました。

そしてある時、老境に達したアーネストが村を訪ねて来た人々に、その村の言い伝えを語っていた時、一人の子どもが、アーネストの顔を見て「あの岩とそっくりだ。」と言ったのです。老境に達したアーネストの顔は、いつしか、あの偉大な岩の顔とそっくりとなっていたのです。」

さて、今日の聖書の個所でイエスの弟子であったペトロは、イエス・キリストによる救いは、実は神の民であるイスラエルの歴史の中で預言者たちによっ

てずっと昔から語られたいたことを知らせています。これは救いの歴史、救済史と言われます。歴史全体を神の救いの歴史として見る見方です。

「10:この救いについては、あなたがたに与えられる恵みのことをあらかじめ語った預言者たちも、探求し、注意深く調べました。」とある通りです。

「神の救い」「救い主・イエス・キリスト」について語った人物で、思いつくのは旧約聖書の預言者イザヤです。旧約聖書の中にイザヤ書という預言の書物があります。特にイザヤ書53章のことばが有名です。

新共同訳聖書の1061ページから始まっています。地上を生きられたイエスさまのことを思いながら聞いてください。読んでみます。

「イザヤ書53章 1:わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるか。2:乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように／この人は主の前に育った。見るべき面影はなく／輝かしい風格も、好ましい容姿もない。3:彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。4:彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。5:彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。6:わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。7:苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。8:捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。9:彼は不法を働かず／その口に偽りもなかったのに／その墓は神に逆らう者と共にされ／富める者と共に葬られた。10:病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ／彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは／彼の手によって成し遂げられる。11:彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人々が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。12:それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし／彼は戦利品としておびたらしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで／罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人々の過ちを担い／背いた者のために執り成しをしたのは／この人

であった。』。

今日の個所の11節には「預言者たちは、自分たちの内におられるキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光についてあらかじめ証しされた際、それがだれを、あるいは、どの時期を指すのか調べたのです。」ともあります。この言葉からは、十字架への苦難の道を歩まれたイエスさまと復活された主イエスを想像できるのではないのでしょうか。イエスさまお生まれになる600年以上前に預言者イザヤは語っていたことになります。

ちなみに、預言者とは、単に未来を語る人ではなく、神の言葉を預かってそれを語る、正直に語る事を務めとする人たちでした。預言の「預」という文字は、「預かる」という文字です。正直に語らない偽預言もいたようです。

イスラエルの歴史は、信仰の父アブラハムに始まります。伝説では紀元前1900ごろ。彼は神の命ずる声のままに、さすらいの旅を続け、今でいうパレスチナに、聖書ではカナンの地と言われますが定住しました。

その後、その地域は部族間の衝突、戦が絶えませんでした。今でもそうです。しかし、紀元前1000年ごろにイスラエルの王ダビデによって統一され治められました。

ダビデが死んで、その後、イスラエルは北と南に分裂します。その後イスラエルは二度に亘って強国に捕囚の民として連れて行かれるという苦難の経験をしめます。預言者イザヤの時代と重なります。救い主であるメシア・キリストが将来この世にあらわれるというイザヤの預言が有名です。先ほど読んだイザヤ書53章が「苦難のしもべ」の話として有名です。キリスト教では、この「苦難のしもべ」の預言は救い主イエス・キリストを表していると信じて、受けとめられているのです。ガリラヤ地方の小さなナザレの村に生まれ、病人を癒し、貧しい人々の友となって生きられたイエスさまのこと、最後は十字架につけられたイエスさま、そして復活されたイエスさまのことです。

わたしたちもイエスさまに心つなげて、信仰の先達から受けついで信仰を大切にしてお与えられたこれからの人生を生き生きと生きて行きたいと思えます。

わたしは、教会に通い出した若い時から聖書をこの世を生きるために読んで来たように思います。きっとわたしたちも、地上の歩みを終え、やがて信仰の証人たちに加わり、神とキリスト・イエスと天に召された信仰者たちと共にあることを感謝し喜び、苦難と栄光に生きたキリスト者の喜びの群れに加わる時が来ます。その時まで、なおしばらくのこの世の悩みはありますが、信仰を捨てることなく、歴史における最後の救い、勝利があることを信じて、やがて完全な救いは実現することを信じて、地に平和を祈り願いながら生きて行きたい

と願います。わたしたちには一人一人にしかできない神さまから与えられた大切な働きが必ずあるのです。雨の止んだ後の空を見上げて生きて行きましょう。主の平安を祈ります。